鼎談

地方自治体がめざすべき多様性社会とは

女性地方議員経験者が語る課題

菅原文子　元南幌町議会議員
宮下裕美子　元月形町議会議員
〈司会〉山崎幹根　北海道大学公共政策大学院教授
当研究所副理事長

鼎談にあたって

山崎　本日は皆さんお忙しいところお集まりいただき、ありがとうございます。当研究所では、今年度から二〇二三年の統一地方選挙を見据え、地方自治の担い手における多様化、ダイバーシティ化をテーマにした研究をすすめることになりました。地方議会をめぐっては、女性や若者の議員が増えてゆくためにはどうすればよいのかといった課題があります。

また、幅広い意味での政治参加で言えば、外国人あるいは性的指向による差別をなくしていくことも重要なテーマになっており、そうした幅広い意味でのダイバーシティ化を考え、実現していくにはどうしたらいいのか。そうした点も研究をしていきたいと考えています。

実は三月一一日に、プレ企画として北海道大学公共政策大学院馬場香織准教授より「政治からみるジェンダー―北海道への示唆―」との題で、女性の政治参加の現状と課題についてお話していただきました（編集部注・内容は『北海道自治研究二〇二一年六月号』に掲載）。

今回は研究会企画としては二回目ということで、実際に地方議員として活躍されてきた菅原文子さんと宮下裕美子さんをお招きしました。最初に地方議員となったいきさつや日常的な活動を振り返ってどういった活動をされていたのか。あるいは支持者や住民とどういう風な関わりを持たれていたのか、選挙活動や新人・女性議員としての苦労したことをお話いただきます。次に厳しい状況にも関わらず、お二人は町長選挙に立候補されました。そのいきさつ、議員選挙と首長選挙の違いなどをお話いただければと思います。

三番目として新たな活動を選択された理由や目指していること、これから地方政治を目指す、若者や女性へのメッセージという流れで進めて行きたいと思っています。

事前にご提出いただいた経歴を見ると、お二人共に地元出身ではなく、ご縁があって南幌町と月形町に居住し、そこから議員になられた点も興味深いところです。最初に菅原さん、お願いします。

1　地方議員に立候補したきっかけ

配偶者から懇願されて

菅原　南幌町に住む前は、アメリカ人だった夫と札幌市に住んでいたのですが、勤務先の関係で家を探していました。その時に南幌町を紹介され、訪ねてみるとなかなかいいところだと感じたので移住しました。

移住して五年目のときに、夫の友人が町長選挙に立候補することになったので、議員として一緒に頑張ってくれる人を探していました。ですが、誰もなり手がいなくて私に話が回ってきました。

夫はアメリカの大学院で日本の政治経済を学んでいましたが、私は政治が得意ではなかったこともあり、断ったのですが、夫から「どうしても議員になってほしい」と懇願され、やむにやまれず立候補することになりました。そうした経緯があるので、私は自らの意志で議員に立候補したのではありません。

山崎　どうしてもやってほしいとお願いしたのがパートナーの方だった、というは非常にユニークですね。

菅原　夫には「立候補予定者説明会で話を聞いてから正式に決めさせてください」と伝え、夫と二人で出席したのですが、なんだかよく分からないうちに名前を書かせられたような状況でした。ただ、立候補するのであれば公約を考えなければなりません。

夫は当時の町長と一緒にまちづくりのワークショップなどをやっていたのですが、私も町民の一人として参加していました。そこでのやりとりから南幌町の問題や課題が見えていましたし、札幌など他自治体に住んだ経験もありましたので、南幌町との比較も出来ていました。なので、自分の思っていることを選挙公報にスラスラ書けたのは一番良かったですね。

菅原文子（すがわら　あやこ）

1959年札幌市生まれ。民間企業を経て、2003年南幌町議会議員選挙に出馬、初当選。11年町議会議員選挙に再出馬し当選。同町町議会議員を4期務める。19年北海道大学公共政策大学院修了。20年南幌町長選挙に挑戦。21年からは厚真町地域おこし協力隊として勤務。

無知な人が入るからこそ議会活性化に繋がる

菅原　世の中では「勉強してから議員になれ」という風潮になっていますが、今、振り返って考えると、全く何も知らない人が議会にポンっと入ることによって、見えてくるものがものすごくあったと思っています。例えば、自治用語、議会用語はむずかしいものばかりで、男性議員は平気で使っていましたが、私は「それってどういう意味ですか？」からスタートしました。

そうしたこともあり、自治や役場についてはもちろん、議員の心得なども必死に勉強しましたね。一期目は、月に二回ほど、早期に家を出て十勝方面に勉強に行き、日帰りする生活をしていました。勉強することによって、いろいろな知識を得たり、人脈ができたりして、そういった議員がたまにいると議会の活性化に繋がるのではないかと思いましたし、そうした成果として、住民に向けて用語をかみ砕いて説明することもできました。

山崎　でも、議員になると今までやられていた仕事を辞めなければならない、あるいはいろいろな準備も必要となると思います。そうしたところで苦労はありませんでしたか。

菅原　私は南幌町初の国際結婚世帯で、娘たちは金髪にブルーアイズだったりしたこともあり、通っていた幼稚園でいじめに遭いました。そうしたこともあり、幼稚園側から「それでは子どもたちに英語を教えてもらえないか」と打診され、議員になってからも幼稚園と自宅での英会話教室を続けていました。ところが、議員になると議会業務が急に入ることがあるので、休みにしてもらうなど、そうした点で大変迷惑をかけました。

山崎　理解のある幼稚園だったのですね。子育てや家事の分担はどうされていたのでしょうか。

菅原　とても理解がある幼稚園で、子どもも英語に親しむし、翌年からは江別などの周辺自治体で暮らす国際結婚者のお子さんたちがたくさん入園しました。家事分担の話ですが、一期目の途中で離婚してしまったので、一人でやっていました。

山崎　議員と母親の二足のわらじで活動されていたのですね。ありがとうございました。それでは続きまして、宮下さんが議員になられたきっかけについて教えていただけますか。

市町村合併を契機に学んだ地方自治問題を解決するために立候補

宮下　私は栃木県出身で、茨城県つくばにある化学メーカーの研究員として勤務していました。夫は東京出身で別会社の同じ職種でしたが、お互いこのまま仕事を続けていくのはむずかしいと感じていて、二人で話し合った結果、農業を始めようと決め、二〇代後半に北海道へ移住してきました。

元々、私は一生仕事を続けたいと思っていて、人生設計として子育てと仕事の両立がありました。そういう意味で農業は自営業で定年がないですし、大学が農学部でしたので、学んだことを実践できるということもありよかったのですが、まずは生活基盤を整えることが目標で、政治に対しては全く興味がありませんでした。

子どもの一人は一〇カ月で連れてきて、もう一人は月形町に移住後に生まれたのですが、その子たちを保育園に預けて働けると思っていたら、季節保育所しかなく、預けられませんでした。私たちは月形町の新規就農者第一号ということもあり、親や親戚などがいない移住者を受け入れるためには、認可保育所が必要だということで三〇歳の時、季節保育所の建て替え時にあわせて運動を始めました。

認可保育所だけではなく、学童保育所の導入を目指して子どもを持つ母親たちと一緒になって一～二年ほど活動したのですが、身の回りを暮らしやすくするためには、当事者が声を挙げていく、運動することがすごく大事だったと気づき、「政治って自分事なのだ」と感じました。

その後、市町村合併問題が起こり、住民説明会などで町側から出てくる財政資料などを見ると「どうしてこの数値でこんなことが言えるのだろう」と違和感を持つようになりました。これを契機に地方財政や行政のしくみを学んだりしていくうちに、このまま町に任せて大丈夫なのか不安になりました。もっと自治を学ばなければならないと感じ、土曜講座に参加したり、北海道自治体学会に入会して地方自治の世界に触れたわけです。そこで改めて、自分たちが関わることが大切だと気づきました。

結局、市町村合併については、私たちの運動とは別な方向で最終決着がついたのですが、その過程で学んだことを生かすため、また疑問を解決するためには議員となることが筋として通っていることだな、と感じていたこともあり立候補することにしました。

山崎　自ら問題意識を持って立候補したということでしょうか。あるいは外堀を埋められるではありませんが、誰かに推されて立候補したのでしょうか。

宮下　私を推す人が誰もいない中で、自分の意志で立候補しました。

山崎　一方で議員は未知の世界ですから、不安や生活が変わることへの心配などはあったのではないでしょうか。

移住経験と立候補を比較して

宮下　北海道に新規就農者として移住した時は、いろいろな意味で仕事も生活も子育ても大きく変わりましたが、どんな苦労があったとしても自分がやりたいという信念さえあれば何とかなる、と思っていました。こうした経験値があったからこそ、議員になることに不安は感じなかった。むしろ、地方自治を勉強してきたからこそ、問題解決のために私は議員にならなければならないと使命感に燃えていましたね。

山崎　そうでしたか。未知のところにやみくもに飛び込むかたちではなかったとは言え、配偶者から何か言われたりしたことはありませんでしたか。

宮下　我が家ではお互いのやりたいこと、学びたいことを好きにやっています。家事も基本五〇対五〇です。夫は私の正義感や問題探究心の強さも分かっていましたし、勉強したことは家族でも共有していました。夫も自治に関わりたいという気持ちがあったようですが、前に出るなら私の方が向いていると感じていたようです。なので、私が合併問題に関わり始めたときから議員になると予感していましたし、最初に立候補の相談したときも「うん、それはいい」でした。

山崎　男女問わず出馬のハードルとして、家族の反対を乗り越えられるのかが大事だとよく聞きますが、今回はお二方共にパートナーの方のご理解があるというのは非常に印象的でした。

宮下　人を説得するのが議員の仕事です。立候補にあたって一番身近なパートナーを説得できないなら議員は務まらない、と私は思っています。確かに家事分担などの葛藤はありますし、夫に言う時はドキドキしましたけど、それはどうしても通らなければならない道ですから。

山崎　なるほど。ここからは最初の選挙に立候補して当選されたときを振り返っていただきたいと思います。

若さ・女性の期待票を集め当選

菅原　前述のように、最初の選挙は三月末の告示間際で突然立候補を決めましたので、知名度はゼロでした。一方、元夫はアメリカ人で、いろいろな活動をしていましたので南幌町では結構有名人でした。でも、元夫は外国姓、私は菅原姓でしたので、元夫と私が夫婦だということも皆さん知らなかった。なので、私の選挙戦は「菅原って誰？」というところからスタートしました。

まず、ポスターを作り、夫と友達が南幌町内にある会館を借りて、町民に対し自分の意見や考えを言うような公開討論会のような機会を作りました。他の候補者は「そんなのやる必要がない」と来ませんでしたが、私を含め新人候補だった三人が参加しました。うち一人は落選してしまいましたが、集まった町民の前で日頃思っていることを伝えました。当時、町村議会では女性議員が少なく、私は四四歳で選挙に挑戦したのですが、同世代の女性議員はほとんどいませんでした。

あとから聞いた話になりますが、「他所から来た誰だか分からない人だけど、若いから期待して入れた」。また、公開討論会に参加した町民からは「すごくしっかりとした考え方を持っているので、信用できる」と思ったそうです。期待票が多かったのかもしれません。

山崎　そうだったのですね。初めての選挙戦の順位はどのくらいだったのですか。

菅原　順位は当選ラインギリギリでした。

山崎　滑り込みセーフだったのですね。ご近所の知り合い票を固める活動をしたのでしょうか。あるいはそうした活動を全くせず浮動票狙いの選挙活動だったのでしょうか。

菅原　票を固める活動はしませんでした。そもそも辻立ちもよく分からなかった。八時までは声を出すことができないので、六時ころから道路に立って、お辞儀をしていました。そうした活動を何日かやっていると、顔を分かってもらえるようになり、近所に住んでいた人が次々来てくれるようになりました。

そして車で通る人たちはほとんどが札幌に通勤・通学する人なのですが、見ていた人から「菅原さん、やる気あるように見えるけど」と声を掛けてもらえるようになりました。

山崎　振り返ってみると、南幌で生まれ育って生業がある方よりも、南幌に住んでいながら札幌に通うような新住民が支持者の多くにいたということになりますね。当選を重ねられてからも支持者の分析や把握はしなかったのでしょうか。

菅原　宮下さんもそうかもしれませんが、票読みをしても読めないんです。と言うのも、後からお話しますが、二期目の選挙は落選してしまい、その時、地元の農協に勤務し、農家と一番接点の近い資材課に配属されました。農家と顔なじみになったことで、三回目の選挙ではそうした人たちから支持していただきました。

宮下裕美子（みやした ゆみこ）

1967年栃木県粟野町（現：鹿沼市）生まれ。宇都宮大学農学部卒業後、民間企業に就職。94年空知管内月形町に移住、96年に新規就農。97年認可保育所設立の市民運動。2003年つきがた未来21副代表として市町村合併の市民運動。07年月形町議会議員選挙に出馬、初当選。町議会議員3期目の16年月形町長選挙に出馬し、落選。18年町議会議員補欠選挙で再選、19年4期目当選。20年再び月形町長選挙に出馬、落選。

とは言え、地域ごとに議員がいましたので、直接「あなたに入れたよ」と言われたわけではありませんが、遠回しに「応援している」と言われましたね。

山崎　あとで伺おうと思っていたのですが、お二人に後援会はあったのでしょうか。

菅原　後援会自体はあります。後援会長には「名前だけ貸していただけませんか」とお願いしてなってもらいました。なので、実質的には機能していませんので無いも同然です。選挙の時は自分でマイクを握り、娘にウグイス嬢を頼んだり、選挙カー運転は後援会長ということもありました。

宮下　私もありましたが、具体的な活動はほぼしていません。

山崎　支持者の名簿などはあるのでしょうか。

菅原　ありません。

山崎　本当に無党派層というか、顔の見えない有権者に訴え続けてきたということでしょうか。

菅原　そうですね。

山崎　意外ですね。そういうかたちで四期やられてきたわけですね。選挙スタイルは四期変わらなかったのでしょうか。

しがらみを感じながらの選挙戦

菅原　多少は変わっていると思いますが、根本的には変わっていないと思います。私自身、一期目はすごく力を入れてきたので、「菅原はトップ当選ではないか」という噂も立つくらい皆さん支持してくれたのですが、二期目の選挙では落選してしまいました。それが判明すると有権者から「菅原さんにトップ当選の噂があるから、今回は地元の人に入れちゃった。ごめんね」という電話が殺到しました。そうした声が一番落ち込みましたね。

落選後、娘たちが小さかったこともあり、母親に徹しようと思いましたが、前述した農協勤務でお世話になった人たちがたくさん来てくれて、「応援するから頑張ってみないか」、「どうかもう一回出てくれないか」と言って背中を押して下さった方がいたんです。

そうした声に応えるべく、「もう一度頑張らせていただきます」と宣言したのですが、なぜか私が住んでいる地域からいつも三～四人立候補する人が出て、地域に住んでいる人たちからは「菅原の事務所へ行くところを他の候補者に見られたくない」と言われ続けていましたね。

山崎　つまり、菅原さん周辺にはその地域に生まれ育った人が多くいて、古くからの保守的な堅い票があるのでしょうね。そうした間隙を突いて当選された。

菅原　最低票で当選したとしても、ある一定の票数以下にはならなかった。なので、周りからは「基本的な支持層は変わらないな」とよく言われました。

山崎　そういう選挙戦だったのですね。やや具体的な話になりますが、選挙といっても先ほど話題にしていただいたポスターとか、車の手配とか最低限やらなければならないことがあると思いますが、それらは誰がやっていたのでしょうか。

菅原　車は自己所有のを使ってやりました。表に出たくないが手伝ってくれるというおじちゃんたちが何人かいて、自分では重たくて出来ない看板設置などをしていただきました。でも、皆さん表立って活動してくれませんので、そうした悲しみはありましたけど。

山崎　それは四期やっても変わらないのでしょうか。

菅原　皆さん口に出さなくても分かって下さるので、応援してくれる人、お手伝いをしてくれる人は確かに増えましたね。

山崎　ただ、当選を重ねても菅原さんを公然に応援することがはばかれるような地域の風通しの悪さはあったのですね。

菅原　何度か町内で転居していますが、引っ越し当初は、その地域に現職議員が一人もいないのに、私が住むとなぜか同じ地域から四人立候補者が出て、結局、特定の候補者に投票するのではなく「あの人と繋がりがあるから」「公平に投票しないとね」「事務所に行けなくてごめんね」と言われることはよくありました。

山崎　そういうところで戦わなければならないのですね。単に女性だからとかではなく、地域の中で公然とした競争ができない大変さがあるということですか。

菅原　はい。そういう事情でしたので、自宅兼事務所には誰も来てくれなくて、手伝いをお願い

していた母親が一人ぽつんと事務所番をしていました。母からは「寂しいね」とよく言われていたものです。

選挙費用は負担に感じなかった

山崎　差し支えない範囲で構いませんが、選挙費用はどうだったのでしょうか。まかなえたのでしょうか。自己資金からの持ち出しは結構あるのでしょうか。

菅原　町の場合は市のように補助制度がないので、全額自己負担です（編集部注・二〇二〇年の公職選挙法改正で町村にも選挙事務の拡大がなされた）。

山崎　どの程度抑えられるのでしょうか。自転車で選挙戦をした人もいますが。

菅原　私は任期途中で離婚してしまい、娘たちを育てなければなりませんから、選挙資金はありませんでした。多人数のウグイス嬢などに公職選挙法に基づく正規の費用を支払いすることはできませんので、重複しますが自分でやったり、娘にやってもらったり、後援会長は寄付というかたちで法律上認められているかたちで手伝ってもらいました。

看板は最初に作らなければならないので、初期費用はかかりましたね。あとは、はがきやポスターの印刷費用でしょうか。写真も必要ですが、近所のおじちゃんに撮ってもらっていました。しかも、だんだん安くなって、最後は「五千円でいいよ」でした。

山崎　二年前に斜里町で小暮さんという女性が出馬したときには、一〇万円以下でできたと話題になっていましたが、一〇万円以内で収めることは周りの力を借りないとできないものですか。

菅原　そんなことはないと思います。

宮下　今は公職選挙法が改正され、町村議会でも供託金が一五万円必要になったので、これからは大変でしょう。私は二～三万円で選挙をやったこともありました。今まで七回選挙していますが、掛かった経費の内訳を全て自分のホームページで公開しています。

最初の時は菅原さんと同じく看板を作ったりして少しお金がかかりましたが、クルマは自前の軽トラックを使って、ポスターは夫が撮った写真にイラストレーターを使い自分で作成し、印刷はネットで一番安いところに頼みました。はがきも同じように作りましたし、たすきも友人が縫ってくれた手作りでそれを使いました。私がここまで徹底したコスト削減選挙をした理由は、だれでも選挙に出られるということを私が身をもって表現したいと思っていたからです。

菅原　宮下さんの言うとおり、一回目の時はポスターと看板が必要なので費用がかかりますね。

山崎　なるほど。金銭的な部分がハードルとなることはなかったということですか。

菅原　少なくても金銭的な部分は大丈夫でした。

山崎　続いて宮下さん、初めての選挙の時を振り返っていただきますでしょうか。

地域票ではなく、不満を抱えている全体票獲得をめざし選挙戦を展開

宮下　先ほど少し話したように、私の場合は自ら議員になりたいと言って立候補しました。市町村合併問題の時、説明会の場に出席していた議員が一言二言、自分の意見を言う機会があったのですが、出てきたのは地域の代表者のような年配の男性ばかりで、こんな感じの人しか出ていないのか、と思いました。

統一地方選前年の一二月くらいから現職のリサーチを始めてみると、地域から推薦こそもらっていませんが、各地域から一人ずつ出ている感じでした。もちろん、私の住んでいる地域にも何期も務めている古参議員がいましたので、私は居住地区とは関係なく、町全体の女性票と若手票、そして町に対し不満を抱えているが、代弁者がいない住民を取り込む戦略を立てました。

〈司会〉山崎幹根
北海道大学公共政策大学院教授
当研究所副理事長

まずは誰かから聞いて教わるのではなく、王道を行こうと思って、「市民派議員になるために」といったバイブル本を買って、夫と二人で勉強を開始しました。これに統一地方選の手引きなども読んで、そこに政治団体の届け出をすれば文書配布ができると書いてありましたし、後援会入会を目的にした戸別訪問ができるともあったので、まず政治活動用に後援会の届け出をしました。

市町村合併をはじめ、熱心に市民運動をしていたので、声をあげる女性＝宮下とある程度認知されていましたが、立候補するには知名度が足りなかった。最初は自分のプロフィールややりたいことなどを記載したパンフレットのようなものを作り、一緒に後援会入会書類を持ち、三カ月くらいかけて町内全戸を回りました。それと同時並行で選挙の目標を立てました。

一期目は「お金をかけない選挙」と「政策を演説する選挙」と決めました。演説するとした理由は、既存の選挙は「よろしくお願いします」と手を振っているだけで、それがすごく嫌だったからです。この二つの目標に「公開すること」も加えた三本柱で選挙戦に臨むことにしました。

ただ、細かい運動方法などは分からなかったので、新規就農した際の元地主さんに相談したところ「場所を貸してあげる」「人を集めてあげる」と言っていただき、近所のおじいさんが何人か集まってくれて、手伝ってくれることになりました。

ところが、皆さんの頭の中には昔ながらの選挙のイメージがあるわけです。私はお金を掛けたくないし、演説をしたいのですが、手伝ってくれたおじいさんたちからは「選挙とはクルマ三台連ねてやるものだ」「みんなで手をふって名前を連呼する」「選挙のはがきには推薦者を並べなければダメだ」と言われました。一期目は自分の覚悟もなかったし、分からないことばかりだったので、そうした意見も取り入れながら、自分のやりたいことも混ぜ込みながら選挙活動をしました。お陰で意見がまとまらず大変でした。

そうした紆余曲折を経た一期目の選挙は、一〇人中三番目で当選しました。当選した時に、「この票の大部分はおじいさんたちの人脈や顔で入れてもらった票であって、私が伝えたいことが伝わった上での得票はどれくらいあったのか」と不安になりました。私の信条として、選挙はその後の議員活動や政治活動を表現する場だと思っていたので、それが表現できない選挙はしてはいけない。やっぱり自分のやりたい方法でやらなければいけないと気づき、二期目以降の選挙はやり方をガラリと変えました。

制約を逆手にとった政治活動

宮下　後援会はあくまで政治活動をするための体裁として考えていましたので、入会チラシは配布しますが、回収はしていません。それは、先ほど菅原さんが話していたように、既存の議員のような地域や関係性による縛りあいを作りたくな

かったからです。みんなが自由な意志で自分の推したい人を推せるようになるには、名簿などを作るよりも私から町民全員にアピールしていくことが必要だと感じ、その方針でやってきました。

山崎　なるほど。表現が適切ではないかもしれませんが、地域の制約を逆手に取るような形で選挙戦を展開されたということですね。

ちなみに、お二方が当選された時は唯一の女性議員だったのでしょうか。

宮下　唯一の女性議員で、月形町議会初でした。

菅原　私は共産党の先輩女性議員がいたのですが、無党派の女性としては初でした。町議会としては二人目です。

山崎　それでも少ないですね。お二方とも晴れて当選されたわけですけど、最初のところでも言及していただきましたが、議会活動で重点を置いていたのはどのようなものだったかお教えいただけますか。

2　地方議員としての日常的活動を振り返って

(1)　重点活動

住民との対話と課題への探究心

菅原　私も宮下さんと同じように、「住民自治」に重きを置いていました。それで自分に何ができるのか、町民に恩返しという視点で考えた際、議員活動とは少々異なりますが、町民劇団を造ろうと思って、一期目の時に町民の町民による町民のための劇団を立ち上げました。キャストもスタッフも全員が南幌町在住者で、南幌に勤務先がある方もOKとし、五年間やりました。主に私の娘たちがリクルートしてきた子どもたちで、子ども劇団に大人が関わるというかたちでした。

また、女性議員ということもあって、議会に思っていること、行政に思っていることを私に相談してくれたり、教えてくれるのです。本当、話しかけてくれることが非常に多かった。

私もそれに応えるために、活動通信を作って、最後は五〇〇枚くらい配布していました。先ほども言いましたが行政用語が難しいので、自分なりにかみ砕いた言葉や、繰越明許費とかどうしても使わないとならない言葉は、豆辞典を盛り込みながら説明したものを配っていました。皆さんからは「分かりやすくてよい」と好評でしたね。このように住民との対話を活動の一番の重きにおいていました。

また、議会の場合は何でも賛成か反対となりますので、私は徹底的に調べて賛成・反対を表明していました。特に一期目は栗山町、由仁町との合併議論がありましたので、合併したら南幌町の町民にとってどうなるのかについて考えました。私は合併に賛成したのですが、決して合併特例債のあめ玉が欲しかったわけではありません。南幌町は私も含めて外から来た人が多い自治体です。これを加味したら、栗山町や由仁町の持ついろいろな考えや活動を取り入れた方がいいと思ったんです。それで私は一生懸命賛成側で動いていましたね。

山崎　相談事を聞く、町政に実現させるということはやはり、教育とか福祉の相談事が多かったのでしょうか

菅原　多かったですね。

山崎　それは一期目に限らず、ずっとでしょうか。

菅原　はい。一期目の初年度は娘たちが小学一年生と三年生でした。学校に行って校長先生と話をして、「どういう問題がありますか?」「私はこう思っているんですが、どうでしょうか?」とアプローチして勉強させてもらいました。こうした努力もあって「菅原は教育」と認めていただくようになりましたね。

山崎　そうでしたか。四期の議員経験の中で一番の政策、事業があれば紹介していただけませんか。

誰もが町民憲章を宣言できるように

菅原　政策と言えば小さなことかもしれませんが、今でも一番よかったと思っているのは町民憲章です。私は町民憲章がおざなりだと感じていました。と言うのも、私は札幌市の出身で、南幌町に住み始めた頃も札幌市民憲章をスラスラ言えました。それは幼少期から事あるごとに市民憲章を

言う機会があったからだと思います。言えることが当たり前だと思っていたので、南幌町民はどうなのですか、と聞いたら誰も知らない。一般質問して取り上げられた結果、今では成人式で町民憲章を宣言するようになりました。ただ、私は成人たちに述べてもらうのもいいですが、もう少し身近なかたちで町民憲章を読んでほしいなと思っています。

それ以外では、町内にあった公園に子どもたちが遊べる池があったのですが、廃止されて大問題となりました。長い時間をかけて町側に働きかけて、なんと復活できたんです。それが子どもたちに好評ということで町民から感謝されているのはうれしいですね。あと、一期目の二年目に議会で市町村合併の賛成討論をさせてもらいました。今でもその時の議長から「あの賛成討論はよかった」と言っていただきますね。

山崎　公園の話にしても合併問題にしても、菅原さんがいろいろとアンテナを張っていたからこそ、問題として掘り下げたのか。それとも住民や支持者から相談事などとしての話から質問や提案につなげたのでしょうか。

政策提案しても採用されず悔しいことがほとんど

菅原　町内の中をぐるぐると見て回り、そこから質問や提案を考えましたね。私はアメリカのサンディエゴに住んでいたことがあり、グローバル化にも取り組んでいたのですが、あの地域は英語しか話すことができないという子どもは少ない。それはメキシコから移民が来る地域なので子どもたちは苦労なく二カ国語、三カ国語が話せるのが当たり前です。だから、小学校から英語学習を始めるべきだ、と何年も提案し続けていたのですが、当時の教育長からは「日本語も話せないのにダメだ」と言われ、反対されているうちに国で小学生の英語教育を始めてしまいました。

また、高齢者が接種する肺炎球菌ワクチンもインフルエンザの予防接種と一緒にやれば相乗効果があるからと一般質問として提案しましたが、健康上の理由などで断られてしまい、数年後に国で進めることになりました。このように取り上げてもらえない悔しいできごとはたくさんありますよ。

こんな何年も先を行く提案ばかりするからか、私は「宇宙人」と言われていましたね。なかなか受け入れてもらえませんし、取り上げてもらえる方が少ないのも事実です。一般質問は一年四回、四期だと七〇回くらいしましたが、取り上げてもらえる＝事業化するのは数少ないです。が、常にアンテナを立てて、言い続けることが重要なのだと思います。

山崎　先見の明があるにも関わらず、問題提起をしているにも関わらずそのような状況なのですね。宮下さんはどのようなことに重点を置かれていたのでしょうか。

議会の情報を徹底的に公開する

宮下　私が議員になるきっかけは、議会が見えない、情報公開していないことでしたから、議員になったらまずは情報を公開し、議会はどのような場なのかをみんなに知ってもらうことが最初の使命だと思っていました。また、情報公開を基本に据えたのは、女性だから教育や福祉と限定されるのではなく、全般を常にやりたいと思っていて、柔軟に対応したいと思っていたからです。

当時は議会だよりもありませんし、活動報告をする議員もいませんから、議会で何があったか全く分からない状況でした。唯一、町の広報で議会のページが少しあり、議決結果と一般質問の項目だけありましたが、そもそも一般質問している議員がほとんどいなかったのですから、分からなくて当然ですね。

これを打破したいと私は思っていたので、まずは高齢者にも読んでもらえるような紙媒体の活動報告書を発行し、全町配布しました。町議会議員は特定の地域や支持者のためではなく町全体を見据えてやる仕事ですから、情報公開する相手は町民全員だと思っていたので、議員を辞めるまで続けました。

また、一期目の一年目は何も知りませんから、すべてが新しいことばかりでしたし、北海道自治体学会や本で学んだことと現場は全然違いますから、ギャップも含めて感じたことを頻繁にブログ

で発信しました。ところが、これまで議会のことをオープンにした人はいませんから、いろいろ言われたのも事実です。そのような中でも議員生活や活動の状況を町民のみなさんに伝えました。

さらに、他の議員は事前の根回しを前提としていたので、本会議などでは質問しません。当時の私に根回しの場があることは知らされませんでしたし、知ったとしても根回し自体がおかしいと思っていましたので、公の場である委員会や本会議で常に質問しました。こうすることで課題をオープンにできますし、それに対する公式回答も得られる。これを活動の主軸に据えてやってきました。

先ほど、菅原さんが周囲から「宇宙人」と呼ばれていた、と話をしていましたが、私は「黒船」と言われていましたね。それくらい皆さんからすればやっていることが違ったということです。

山崎　すごい呼ばれ方ですね。教育や福祉など特定の分野、テーマで尽力したものはありますか。

同僚議員がやりたがらない分野に尽力

宮下　私が四期の議員生活のなかで思い出に残っているのは、一期目の光回線導入ですね。地方議員のネットワークの中で、二〇〇〇年の森首相（当時）が打ち出した「e-Japan 構想」を知り、すぐに月形町でも取り入れようと提案しました。当時、インターネットや光回線の有用性を理解している議員がいなかった中で、補助率九〇％以上で導入できたのは、とてもよかったと感じています。

これ以外では制度改革、法務とかシステム、財務に力を入れていました。個別案件は各々の議員で得意分野がありますので、そうしたところではなく、皆さんがやらない法務などに挑戦したので、行政側からは煙たがられました。特に指定管理者制度の運用や予算組み立て、月形町では初めての修正案を提案したこともありましたね。

山崎　まさしく、本来の議会のあり方ですよね。

宮下　認可保育園が認定こども園に移行する際、子どもを通わせていた保護者からは不安の声が出ていましたので、女性議員ならではといいますか、同世代だからできる話のしやすさで、保護者側に立って行政との間を取り持つかたちのサポートをしました。これ以外にも町民側の要望に行政を寄せるような運動をしていましたので、行政側からは「宮下さんが入っているから話がすんなりまとまらない」とよく言われたものです。

でも、問題点やシステムといった根本的な部分に切り込まない限りは、なぜそういうことになるのか分かりませんし、制度運用がおかしい場合は交付金・補助金が減額されますから、時にはお金が足りなくなって修正案を出すことに繋がる。こうした事実を理解してくれる人もいますが、基本的には理解されません。大半の議員からは「そんなことは行政の考えることだから任せておけ」と言われましたね。

山崎　個別の案件ではなく、全体のしくみなどを適切に回していくため、既存のやり方に異議を唱え、チェックをしたり批判をしたりという点に重きをおかれていたということですね。

⑵　支持者との関係

山崎　宮下さんの話では特定の住民や支持者との関係ではなく、幅広く町民に理解してもらうことを続けてきたとのことでした。そうした議会活動や質問はなかなか住民には理解されにくいと思うのですが、支持者との関係で苦労された点はありますか。

住民の琴線に触れるような活動

宮下　いろいろな考え方の町民がいますし、役場ＯＢなどもいますから、難しいと言われたりします。そう考えると苦労はあります。私自身は地方自治や住民自治を進めるためには、自律した市民の醸成が重要だと考えていましたので、菅原さんと同様にかみ砕いた言葉で情報提供するなどの工夫はもちろん、とにかく得た知識は皆さんに還元し、疑問や質問があったらいつでも受け付けますという姿勢でやっていました。

そうした活動を続けていると住民の琴線に触れることができます。宮下さんなら動いてくれるだろうと生活の困りごとを相談してくる住民もいますし、不法投棄の連絡や議会のやり方について指

摘する意見などありましたね。

山崎　それは居住地域の人ではなく、全町の不特定多数の方からでしょうか。

宮下　はい。

山崎　不特定多数の方から相談が持ち込まれたりするのですね。

宮下　地域の議員へ相談したが全然動いてくれないので、最終的に私のところに来るケースもありました。だから困難案件や面倒な案件ばかりでしたが、行き場のないことに向き合うことで課題を掘り起こし、次の質問にも生かすことができます。

山崎　不特定多数の町民を介してという意味で宮下さんにお聞きしたいのは、選挙活動でいうと町民の皆さんとの関係が可視化されて強くなったり、太くなったりするのでしょうか。菅原さんのように、不特定多数の人を対象とした選挙をしてきたのでしょうか。

地方特有の人間関係と選挙活動の両立

宮下　選挙は本来、個人の秘密が守られる、生活を脅かさないためのシステムなのですが、現実は少し違います。「本当は宮下さんを推しているけれど付き合いがあるから入れられない」と言われることがよくあります。でも議員時代はそれで全く構わないと思っていました。と言うのは、私のような議員活動をしていると「宮下って誰？　分からない」という住民は少ないはずです。だから絶対落ちるはずはなく、最下位当選のラインには入れると感じていましたし、このやり方で落ちたのであれば自分のせいではないと思っていました。

だから、敢えて特定の住民とだけの関係性は作らないようにしていました。田舎の人間関係からすれば、選挙の時にこっちに入れて欲しいと押しつけるのは有権者を悩ませるだけです。だから二期目の選挙からは一切手伝いを頼まず、家族だけでやることにしました。お手伝いのお願いがしがらみを作り出すことになりますし、手伝いに来てくれる人にも申し訳ないですから。それでも「陰でなら手伝える」という人が宛名書きをしてくれたり、ちょっとしたことを手伝ってくれる人はいました。

山崎　冒頭で後援会の名簿作りが話題になりましたが・・・。

宮下　名簿作りは一応やります。私は一期目の時から活動報告書を全員に送付する前に月形町の選挙人名簿を閲覧しに行き、それを写して町民の動向を継続的にチェックしていました。皆さんからすれば不審な行動と感じるかもしれませんが政治活動の一環としてです。選挙人名簿の情報から町内で転居したり、家族が同居したり、独居になったことなどが分かる。

政治にかかわる者として合法的に入手できる情報をデータベース化し、住民がどんな課題を抱えているのか、どう町が動いているのかを把握することに活用していましたね。人口三〇〇〇人ほどで、有権者数が二七〇〇～二八〇〇人くらいの規模だからできることですし、だからこそやらなければという考えでした。

地域のイベントに参加して住民と交流

山崎　菅原さんにもお聞きしたいのですが、日常的な住民との関わりとしては狭く太くではなく広く、不特定多数の住民と交流していたのでしょうか。

菅原　今宮下さんが言っていましたが、私のところにも相談へ来てくれる人は多かったです。他の議員に言っても埒が明かないし、どうせ言っても無駄だから、という声もありました。私は自分の居住地区とは関係なく老人会や夏祭りに出向いていましたね。南幌町では行政が主体となって町内数カ所でまちカフェを開いて、軌道に乗ったころに地域へ移行させるような事業に取り組んでいたこともあり、その会場に私が行っていろいろな話をしました。

宮下　私も地域のお祭りやイベントは行くようにしていましたね。顔が知っていれば相談に行きやすい雰囲気になるからです。すぐに変化は感じられませんが、必要なことですね。

菅原　でも私の場合は宮下さんと逆で、議員ではなく一個人として行っていました。だから会場の端っこで引っ込んでいるわけです。そうすると参加している人たちから「菅原さん、何やってる

の。一人ずつ回りなさい」と怒られました。個人として来ているので名刺は配りませんが、一人ひとりに声を掛けて「何か困りごとはないですか」と聞いて回りましたね。

山崎　いい意味でおせっかいな方がいらっしゃるということですね。

菅原　そうです。「今顔売らないでいつ売るの」とか言われました。後でお話しする町長選の時も同じように怒られましたね。

山崎　それは日常活動の時ということですよね。

菅原　そうです。選挙の時だけではないです。

山崎　普段の選挙活動はどのような感じでやられていのでしょうか。普通は公示期間前、年明けくらいから動き始めると思うのですが、お二人の選挙活動について教えてください。

選挙のために議員をやっているのではない

菅原　私は一期目の時、二期目のことを考えずに議員の責任だけ全うしたかったんです。他の人からは「そんなことしたら選挙に負けるぞ」、「選挙の次の日から選挙だぞ」と言われました。でも、私は議員としてやらなければならないことを優先しました。結果、落選して、選挙ってそういうことか、と身に染みました。

けれども、四期目まで選挙のスタンスは変わりませんでした。私は選挙のために議員をやっているわけではありませんから、自分の調べたいことを徹底的に調べて賛成・反対と表明していました。時には住民からやり玉に挙げられる事もありましたが、こうした活動で落ちたら仕方ないと思っていましたね。

ご存知かと思いますが、南幌町は市町村合併の時に住民投票を実施しました。これによって隣の人は合併、あちらの人は自立というように町民が真っ二つに割れて、険悪なムードになりました。同じ地域から四人も議員が出ると顕著にあの人・この人となり、町をさらに二分することになってしまうので、私は普段から広い意味での選挙活動をしないようにしていました。だから怒られる原因になるのでしょうけど。

山崎　それでも二〇〇七年はご苦労されていますが、当選を重ねられてきました。

菅原　選挙活動と言っても、一般的にポスターと選挙はがきと、名前を書いたやりたいことリストを印刷し、後援会入会申し込み用紙を差し入れて配布する。名前を書いてＦＡＸで送ってくる方もいますし、私も宮下さんと同じで回収には行きません。

山崎　宮下さんはどのような選挙活動をしていたのでしょうか。

議員活動＝選挙活動

宮下　そうですね。議員活動そのものが選挙活動につながると思っていたので、菅原さんと同じ考えです。先ほど話したように日々のブログでまちの現状や課題を発信し、活動報告書も発行していたので、他の議員とは差別化できていました。私以外に議会情報を発信している議員は未だにいませんし、議会だよりも私が一期目の時に提案して始まったのですが、それとて大枠のことしか記載されません。

結局、細かい情報公開は私しかいなかった。そう考えると、情報の公開が選挙活動みたいなものでしたね。私が落選したら町民は議会の細かな情報は一切受け取れない、ということになりますから。選挙の前になって慌てて選挙用の特別なことはしませんでした。

山崎　宮下さんはマニュフェスト大賞にも参加するなど、いろいろとアイデアを持って選挙活動をしているイメージだったのですが。

宮下　告示後五日間は選挙期間中にしかできないミッションを課してやっていましたので、アイデアを投入しましたが、それ以外は普段の議員活動が選挙活動の前哨戦だと思っていましたね。他の議員は選挙の半年くらい前から急に人を集めていろいろ始めるのですが、私はそれが嫌でしたのでやりませんでした。

⑶　女性議員としての苦労

山崎　ありがとうございます。続いて若者、女性が少ないことは議会・議員活動を続ける上での

苦労かと思いますが、差し支えない範囲で構いません。今後の教訓として教えていただけませんか。そして、本日の北海道新聞には、内閣府が実施した「政治分野における男女共同参画の推進に向けた地方議会議員に関する調査報告書」が紹介されていました。

関わる部分だけ紹介すると、立候補から選挙期間中の課題、現在の議員活動における課題や、女性議員が少ない理由を質問していますが、一番多いのが専門性を高めたり見聞を広げたりする活動の時間が無いのが五九％、その次が議会活動に関する資金が不足しているが四〇％でした。

そして、家庭との両立が難しい三五％、女性として差別されたり、ハラスメントを受けたりすることが三〇％、専門性を高めたり、見分を広げたりする手段がない二九％、自分の力量に自信が持てない二九％、男性議員の理解やサポートが得られない二三％という感じで、地域の理解が得られない一一％、家族の理解やサポートが得られないが一〇％ということで、意外なことに専門性を高めたり、見分を広める活動の時間がないが複数回答ですが六割で、圧倒的に多いことが私は意外と感じました。そうしたギャップなども含めてお話しいただけますか。

子どもたちと過ごす時間がとれず

菅原　私は一期目の途中で離婚しましたので、一人で娘二人を育てていたという観点で話をしますと、ひとり親家庭の母親に時間が無いというのは間違いありません。私は二年生と四年生の娘を育てながら議員をしていましたが、冒頭で説明したように、月二回ほど地方に勉強へ行っていましたし、ほとんど毎日いろいろなところに勉強に行っていたので、ほとんど家にいませんでしたから、毎日料理を作ることは無理な状況でした。お弁当とカップラーメンを箱買いして置き、出かけるという生活が何年も続きましたね。だから苦労したのは私ではなく、娘たちでした。娘からは「添加物の多い食生活だったから心配だよ」と言われ、謝るしかことしかできなかった。

もちろん、母親によっては寝ないで食事を作り、冷凍庫に保管するなどする人もいるかもしれませんが、私は帰宅後も夜中までずっと勉強していました。そうしないと議員の仕事に追いつけなかった。まさしく時間が足りないはその通りだと思います。やはり、お母さんの意識も変えないとすべて一〇〇％は無理だと思います。そうしないと自分が壊れてしまいます。ある程度のところで家族に協力してもらうことも必要です。

私の場合は札幌に住む両親が協力的で、家に泊まりこんでやってくれたりして一生懸命やってくれたのはありがたかった。私の代わりは両親がやってくれたという感じです。本当に一人きりだったら大変だったと思います。

山崎　さすがに、娘さん二人置いて家は空けられないですものね。

菅原　幸いなことにオール電化住宅だったので、火の元などの心配がなかったこともあり、家は空けました。繰り返しになりますが、食生活だけは本当にかわいそうなことをしたと思っています。ある時、「お母さんの作る料理で一番好きなもの」と聞かれ、娘は作ってもらった記憶が無いので「ない」と答えたそうです。また、お誕生日とかで娘たちに外食しようと誘っても「お母さんの手料理が食べてみたい」と言われましたね。

あと、近所に親しくしてくれるおばちゃんがいて、帰宅すると玄関に料理がぶら下がっていることもありました。そうした優しさもあって娘たちはなんとか成長できたと思っています。本当に私のわがままに応えてくれる周りの人たちの協力はありがたかったですね。

知識を深めるために大学院進学も周囲から非難される

山崎　気になるのは古い体質の議会に入られて、旧例や慣行がいっぱいあると思うのですが、そうした苦労はありますか。

菅原　三期目の時、北海道大学公共政策大学院に進学しました。宮下さんを見ても他の方を見ても私は議員として知識が足りないと感じていましたし、人脈も作りたいと思っていたことが理由です。でも、入学すると周囲から絶対に何か言われ

ると思ったので、職員にも議会にもその事実を伏せていました。ある時、大学院に進学したことが発覚してしまったのですが、理事者数名と男性議員から「余計な勉強してくるなよ」言われ、それは議員を辞める時までずっと言われましたね。

山崎　それは酷い話ですね。そのような状況で普段の議会・議員活動の情報の共有などはどうだったのでしょうか。議事運営、質問時間、調査活動などにもいろいろ苦労があったと思うのですが。

菅原　常にアンテナを張っているから一般質問はすぐに出来ますね。ですが、あらゆる情報を集めなければなりません。同じような質問をしている人をネットで検索し、出てきた全然面識のない議員に電話やメールをして、教えてもらったりしました。例えば教育などの専門的なことは、知り合いの教育関係者に連絡して聞いたりしていました。苦労と言えばそうかもしれませんが、あまり苦労だと感じませんでした。

山崎　新人、あるいは女性だから差別されたというのはありましたか。

菅原　それはしょっちゅうあります。数えたらきりがありません。

山崎　質問時間の不当な制限などはなかったのでしょうか。

菅原　南幌町議会は質問、再質問、再々質問の三回と決まっています。質問内容に対する町長答弁内容がかみあわない時は議長にお願いして、質問を六回したこともあります。

宮下　それはまともな人がいるってことですよ。

山崎　今、菅原さんは明るく流されましたけど、そうした女性だから新人だからということでの苦労や嫌がらせは少なくなかったのですね。

女性特有の活動制限
男性議員と一緒の視察はダメ

菅原　一番困ったのは活動が制限されることです。例えば、視察に行きたいと言っても、同じ考えを持つ男性議員と二人で一緒に行くことはダメと言われたり、行くとあの二人は関係を持っているのではないか、と言われたり、選挙でも後援会長や手伝いをしてくれる方を私が唆したとか言われましたね。

山崎　そういう風に見られてしまうのですか。

宮下　菅原さんはシングルだから余計そうみられるのかもしれませんね。

菅原　このように制約されるので、いろいろなところにひとりで行きました。それが苦労ですね。

山崎　そうでしたか。女性であるが故の苦労ですね。確かに賛成・反対について説得力を持って表明するためには現地・現場をいろいろ見て回ったり、勉強しないとなりませんからね。市町村合併の話が出た時にお伺いすればよかったのですが、合併には賛成だったとお話されていました。なかなか大変だったのではないでしょうか。

菅原　私は「なぜ合併しないのか」という逆の視点から考えることにしました。なので、「合併しない」と早期に決めた自治体ばかり訪問しました。それを前提として、南幌はどうなんだろうと考えた時に、やっぱり合併だなと思いました。例えば、十勝地方は土地柄として自分たちでなんとかする。ダメなら助け合ったり、手を借りようという考えだった。でも南幌の場合、他人に頼る、自治体に頼る、議会に頼る、すべて頼るという状態でしたので、自立できない。そういう意味で栗山町の知恵を貰い、由仁町と助け合って行ったほうがいいと考えました。

山崎　そうした事実を町民に対して訴えていくためには、繰り返しになりますが、勉強し、現地を視察し、生の声を聞く必要もありますからね。それでは宮下さんはどうでしょうか。

先輩議員からの露骨な嫌がらせ

宮下　これは私が個人的に感じていたことですが、新人として見られる一期目の一年目や二年目くらいは、新入社員が苦労する程度のことしかありませんでした。それは、性別や年齢問わず庇護の対象になるからです。もちろん、女性が初めて入ってきたのでお酌しろといったセクハラ的なことはありましたが、基本的には庇護の対象となっていたので問題はなかった。ただ、私もやりたいことがあって議員になっているし、勉強もしましたので二年目くらいには他の議員と対等に議論も

できるようになり、提案もするし活動報告書を発行するなど、他の議員がやらないことをどんどん実行しました。

一般質問も他の議員は一年に一回やるかやらないかですが、私は毎回四問くらい質問しました。月形町議会は一問一答方式を採用していて、三回まで再質問可、時間も自己申告制でしたので、他の人は二〇分くらいで終わっても、私ひとりだけで半日使うこともざらでした。

それを腹立たしく思う議員からは、質問時間制限を設けるべきだという意見が出ました。質問者が多く、一般質問だけで三日もかかるのであれば制約が必要ですが、一般質問をするのが私しかいないのに、なぜ持ち時間を減らすのかと先輩議員に意見したら、一期目の終わり頃には「何様だ」という雰囲気になりました。

二期目になったときは決定的で、一般に二期目になると何かしらの役職や派遣議員に就くケースが多いのですが、私は一切ありませんでした。議会改革をしたいと希望しても議会運営委員会にも入れないし、常任委員会も一委員でしかないし、他の議員は予算決算の時も順番で委員長になったりしていたのですが、それもできませんでした。

議会運営の中枢に携われなくなり、それが悔しくて、二期目は外に出て人脈作りをしようと発想転換し、専門的な勉強会に参加することにしました。とは言え、私も新規就農で借金もありましたし、子どもも二人おり、裕福なわけではありませんし、出かけることもできないので、ネットを利用して活動をしました。

ほど遠い議会改革への道

宮下　そういう行動をしながら、様々な制約を乗り越えようと活動するのですが、一番やりたかった議会改革の部分に一切手をつけられなかったのは苦しかった。三期目の時は先輩議員が抜けて中堅になり、後輩も増えたので、ようやく役職に就けそうだと思ったのですが、役職などを決めるのは慣例として正副議長一任なので、当時の議長と犬猿の仲だった私は、またも無役になりそうでした。その時に、前議長が「三期目の議員に何も役職を任せないのもまずいだろう」と言ってくれ、私は常任委員長に就くことができました。

常任委員長になったので、さっそく町商工会関係者を参考人招致しようとしたところ、議長は「呼ぶ必要はない」と一蹴しました。私は委員会のことなので委員長判断で招致できることを伝えましたが、議長が対外的窓口になっているため、一切許可してもらえなかった。行政を呼んで所管事務調査だけでは情報が限られるので、現地視察などもしたいと常任委員長として申請しても議長の許可が得られませんでした。

そんな状況から議員の限界を感じ、三期目途中で議員辞職して町長選挙に立候補し落選しました。町民として議会傍聴に行くと、それまで持ち帰り自由だった議案書や予算書などの資料が、なぜか閲覧のみになり一切持ち出し禁止になっていました。このような変更は議会の都合で自由にできてしまうので、議員時代の私は、議会規則を条例化して昔ながらの標準会議規則を改めたかった。でも、それを議論するのは議会運営委員会で、そのメンバーにはなかなかなれなかったし、常任委員長になって議運のメンバーになったあともいろいろ制限を受けてできなかった。とても悔やまれました。

議員時代には、こんなこともありました。議員活動をする上で必要な設計詳細などさまざまな情報は行政の窓口に行ってお願いすれば取り出せていたのですが、ある日突然それができなくなった。そうなった理由はよく分かりませんが、情報がないと議員活動ができませんから、情報公開請求で必要資料を請求しました。手数料として一枚三〇円の費用がかかるので、年間数万円くらいかかりましたし、開示まで二週間かかるのですが、その引き延ばしもありましたし、開示されてもマスキングばかりの資料が出てきたこともありました。

開示資料から問題箇所が発見されたときは住民監査請求もしました。月形町では初めての出来事でしたし、南空知でも何十年ぶりの出来事だったそうです。こういうことやるから嫌われるのでしょうけど。

山崎　あらゆる手段を使わないとこじ開けられないから、やむにやまれず手段としてやっている

にも関わらず、議会改革を頑張るほどそれを理解しない人たちとの間で、生産的では無いかたちで対立があり、理屈が通らないかたちで活動が制約されているところで、相当苦労されたということですね。

宮下　どうやったら壁を打破できるかと考えるようになりました。その結果が先ほど話した法務です。法律が自分を守ってくれると思っていましたので、理不尽なことを言われても「地方自治法にこう書いてある」と主張して最低限のことは守ってきましたが、地方自治法は最低限のことしか規定されていません。

本音を言えば、栗山町や芽室町のような議会改革をやりたかった。私が議員になったころ、栗山町議会基本条例が制定され、同じ空知管内ということもありよく勉強しに行きました。これ以外にも、最先端のことを学びたいと思って、行政職員や専門家が集まる研究会に参加して自分のアイデアや考えが通用するか必死に取り組みました。

ですが、私は自分の議会内ではボタンを掛け違えたことからより問題が深刻化したと感じています。菅原さんはそうした点は上手にやっているな、と思いますね。議員は永遠に続くのではなく、一期四年という時間しかありません。任期中に起きた問題は持ち越しせず、四年間で解決するため全力を尽くし、目の前にある壁を突破することをやってきましたが、地域の今までのやり方とは相容れなかった。私が議会改革を口に出せば出すほど、遠のく感じでしたね。

全国どこにでもある女性議員をめぐる問題

宮下　女性議員ならではの苦労については、私も常に情報発信していますから、同じ境遇や悩みを抱えている人が検索によって私を見つけ出して連絡をくれました。相談を受ける立場になることもよくありますね。また、女性議員の中には、議事録を読み漁る議員もいて、私の質問の仕方が参考になったと連絡をくれた人もいました。こうした関係は二期目以降、議員を辞めてもずっと続いています。

こうした活動から、私がぶつかってきた問題はどこでも多かれ少なかれあるんだな、と思いますね。確かに田舎は家父長制の感覚が残っていて、議会も男性中心ですし、最終的には多数決で押し切られてしまいます。もちろん、地方でも先進的議会では少数意見もきちんと認める、取り入れることもありますが、数の論理で押し切られてしまうことに悩んでいる方はすごく多いと思います。

今年三月八日の北海道新聞に「全道の女性議員の四割が性差別経験あり」という記事が出ましたが、これを読んだ仲間たちから「ずいぶん少ない」「本当はもっと多いはずだ」「この数字は最低限の値だ」と話題になりました。でも、ハラスメントは感覚問題になりますから、それが当たり前という環境に置かれていると感覚が麻痺してしまい、セクハラかもどうかも分からなくなります。マスコミも常に「性的な嫌がらせはあったか」という聞き方をしているのですが、セクハラの表れ方は多様ですし、わかりにくいかたちの差別、区別があって、判断は難しいです。

その原因が自分自身の資質によるものなのか、女性という性別によるものなのか。女性＝性別という変えがたいものに起因すると思うと苦しいけども、自分自身のやり方が原因と思えれば転換の道筋が見えてくることもあるのでセクハラと捉えにくい。すごく複雑な課題だと思います。

山崎　どういう構造となっているかわからないところがあるので、また難しいテーマでもある問題ですから、興味本位で聞くわけにもいかないし、かといって触れないわけにもいかない。今回、非常に忌憚なく言葉を選んでお二方に指摘していただいたことは私にとっても貴重な機会となりました。

宮下　女性を差別したり排除するのは、男性だけのホモソーシャルな空間の中に入ってきた少数の女性が、自分たちの発想を超えた理解できない言動をするので許容できず、自分たちの空間を脅かす存在だと考えてしまうからではないでしょうか。女性を参加させることによって多様性が確保できて、現実社会に近づくのですが、今は過渡期なので、そういう感覚の男性たちの不安をどこかで解いてあげることが必要なのかもしれません。

議会事務局の重要性

山崎　同僚議員や行政職員、理事者に理解者はいたのでしょうか。

宮下　たまに意識の高い職員が議会事務局に異動してきたときは、一緒に動いたりしたこともありました。修正案は会期中に出さなければなりませんから、事務局の協力なしにはできません。専門家にも添削してもらったりもしましたが、その時は事務局と議長がやってみたいと思ってくれたのでできました。

また、協力はしてくれませんが、行政側も私が何を指摘しているか分かってくれている人もいましたね。ただ、課長や理事者に近い人からすれば面倒だな、と感じていたと思います。

菅原　議会事務局職員は議員のために働く仕事なのですが、行政側から異動で来て二年くらいで戻っていきます。だから来る人によっては議員側に徹する人もいましたし、一般質問通告書を作成する際、原型を留めないほど赤字で修正する人もいて、「なぜ？」と思ったこともありました。また、戻った時に「あのときは議員の味方をしていたじゃないか」と言われ、孤立してしまった職員もいました。議会事務局は人によりますね。

山崎　私もいろいろな議会事務局とお付き合いさせていただいていますが、事務局長さんがどういう方なのかで大きく変わりますね。議会改革も議員の立ち位置も変わるのは事実だと思います。

地方議会こそ制度導入による改革が必要

宮下　議会は自律権を持つ独立した機関ですから、例え問題が起こっても議会のことは議会で決めなければならない。時にそれが仇となることがあります。非常にはがゆいところで、勉強仲間で「地方議会法を制定してほしい」と話題になっています。地方議会がどうあるべきか、どこを目指していくべきかについて地方自治法では一部しか触れられていませんし、国会のような議院内閣制ではなく二元代表制だというのも理解されにくい。マスコミもすぐ与党野党と表記するように、最低限のことすら共有されていない状況です。

また、地方議員の多くは身内の論理や非公開性といった不透明さを増すことで議会を守っていますが、基本的な情報の開示やクオータ制のような「議会には女性がいないとダメだ」という制度導入の改革が必要だと思います。一方で国は、二〇一八年に男女の比率を政党で履行させる「政治分野における男女共同参画の推進に関する法律」を制定しました。また、大企業では女性の管理職比率を高めるなど、男女平等に向けた動きがあります。さらに、ＳＮＳを使って様々な人と同時にやりとりをしていると都市部と若い世代は認識が変わってきていると感じています。

結局、大企業が多く、国政とも関係のある大規模自治体では、こうした任意による制度導入でも男女平等は進むのでしょう。でも中小企業しかない、議会に政党も無い地方の小規模自治体では何十年も遅れたままとなります。それを打破するのは制度導入による改革しかないと私は思っていて、政党が男女半数にするというような婉曲的なものではなく、国が直接的な制度として導入しない限り男女平等は達成できないと感じています。私見ですが、地方では制度ができれば従順に従い、それが社会的少数者のよりどころになるとまで思っています。

でも、道議会議員の半数が札幌市から選出されているように、法律を作っている人が住むのは都市部と人口の多いところがほとんどです。肌感覚で地方のことは分かってもらえない。さらに人口の少ない小規模自治体は相当数ある。道内に限っても人口五〇〇〇人以下は一七九自治体のうち、八二自治体あります。こういう地域は女性の政治参加とは無縁のままも多いので、改善のために力を注いで欲しい。制度改革を望みます。

３　町長選挙に挑戦したいきさつ

山崎　ありがとうございました。今日ご参加いただいたお二人は非常に厳しい状況の中で昨年、町長選挙に立候補したという共通点があります。議会議員選挙と町長選挙違いについて、菅原さんからお話いただけますでしょうか。

無風が続いた町長選挙
だからこそ選挙が必要と立候補

菅原　南幌町は前町長の三期目と四期目は無投票だったので、選挙公約もマニフェストもありませんから、町民との約束事もなく、町長が何をしたいのかも分からなかった。そうした状況から、私は「町長選挙には対抗馬がいてしかるべき」と常々考えていました。というのは、前町長を非難する訳ではありませんが、直近の事例として、一〇億円の誘客交流拠点施設を建設するときも、対象となる子どもを持つ住民からは意見募集しましたが、全町民には説明もなく意見も求めなかった。無投票が続いたことで、住民関係がおざなりになっているな、と感じていました。

昨年の一二月に町長選挙が行われる予定でしたが、町長が大怪我をして入院し、数か月後に退職しました。九月の定例会と決算委員会を迎えることになりましたが、開会直前に職務代理者だった副町長が辞職、出馬表明したので、総務課長が職務代理者となりました。いくら町長代理と言っても、私たち議員が総務課長に一般質問したところで責任を持てないことは分かっていました。

さらに言えば、教育長もその年の九月末で任期が満了だったこともあり、理事者三人が欠員状態となることも分かっていながら、副町長は定例会前に辞職したのです。前町長の後援会をそのまま引き継ぐことが決まっており、後援会としては四回選挙を経験していますから、定例会と決算委員会を終わらせてから退職することもできたはずなのに、それを選択しなかった。

結果、私は一般質問で誘客交流拠点施設のことも、新型コロナウィルス対策について問いただしたかったのですが出来ませんでした。また、決算委員会の委員長だったこともあり、付託案件があった場合、誰に付託すればいいのか。すごく重要な問題に直面しました。

そうしたこともあり、町長、副町長が辞めた直後に「議会の中から誰か立候補しないのか」という話題が出てきました。以前から名前の挙がっていた人はいたのですが、その人たちは全員立候補しないことになり、議員数人から「菅原は勉強しているし、副町長に対抗できるのは今の議会で菅原しかいない。出てくれないか」というオファーがありました。

そこで私は、いつも厳しい言葉をかけてくれる住民の方だけに「町長選挙に立候補しようかと思っているのですが」と相談したところ、「菅原さんしかいないと思っていた」と言ってくれる声が多かった。九月一五日に立候補を決め、定例会最終日の九月一八日に議員辞職の辞表を出しました。そして、一週間後の九月二五日に告示、一〇月四日が選挙というタイトなスケジュールでの戦いとなりました。

私が町長選挙で争点としたのは、とにかく住民を大事にするという住民自治と情報公開でした。

先ほど話したように、前町長は誘客交流拠点施設の建設に際して住民への説明をせず、議会にもほとんど説明していなかった。担当職員は国からの補助が決まっているような言い方でしたが、町長はまだ構想の段階だから決定はしていないと繰り返すばかりでした。私は老人会や町内会の忘新年会などに来賓として出席するのだから、そこで説明すればいいのでは、と一般質問したのですが、前町長はそういう場にも行かず何の説明もしなかった。

事業内容を考えれば、やっぱり住民にはお知らせしましょうよ、というのが町長選挙に立候補するきっかけでしたから、選挙期間中ずっと訴え続けました。争点にした誘客交流拠点施設ですが、二〇二一年三月五日の定例会で予算が通ったものの、わずか数日後の三月一二日に内閣府から地方創生拠点整備交付金四億一千万円の交付が見送られたと通知があり、補正を組んで減額しました。

しかも、住民のほとんどがその事実を新聞で知るわけです。同じダメでも、住民に情報公開して、意見を聞いた上であれば住民も納得するでしょう。それが無かったので、今頃になって「なんだこれは」と問題になっているようです。

もし、立候補していなかったら後悔していたと思いますね。勝っても負けても結果が出ている。選挙もなく、副町長がそのまま町長となったとしたら、私は絶対負けてもいいから立候補すればよかったと思うでしょう。そうしたこともあり、私は今、すっきりしています。

選挙戦の違い―私が立候補したことで住民との約束事が明確に

山崎　選挙戦の違いはどうでしたか。

菅原　議員と町長選挙の違いですが、議員は「こういうことをしたい」と言っても執行権がないので目標でしかありません。でも町長には「私はこれをします」という執行権があります。「します」ということは責任が伴いますから、私自身も議員選挙とは全然意識が違うと思いながら戦いましたね。

でも、相手は一〇〇人規模の後援会を作りましたが、私は出遅れたために作れませんでした。後援会長には議員時代にお願いしていた人に事後承諾を得て、ウグイス嬢も何人かにお願いしましたが、それ以外の体制は何もなかった。むしろ、農繁期だったこともあり、農家から「時間が無いときになぜ選挙にするんだ」と叱られましたね。

だけども、今改めて選挙当日の新聞を見てみると、副町長側は誘客交流拠点施設の実現、それも北広島のボールパークと同日開業しますが公約でした。地方創生拠点整備交付金が見送られたことの新聞記事には、「私の公約だったのですが」とはあるものの、最後まで「住民に説明します」という言葉はありませんでした。

その一方で、選挙翌日の新聞記事で当選者の声として「住民を大事にします」と発言していました。これは私が住民自治を選挙で訴え、結果として負けましたが、住民もその重要性に気づいてくれたと思います。とは言いながら、実際は住民を大事にしていないようですが、重要なことは新聞記事として出たことです。そういう意味でも私が立候補した意義はあったと感じています。

山崎　菅原さんが立候補したことによって、南幌町政の風通しを良くした。逆に言うと菅原さんがそこまでしないと風通しが良くならなかったということですよね。

菅原　周囲からは「なぜ、菅原さんが犠牲になったの？」とよく言われますが、私は犠牲になったとは思っていません。

山崎　そのあたりのご自身の整理はついていると。

菅原　最初の頃はいろんなことがあったので辛かったですが、今、ここまで来たら整理はつきました。大丈夫です。

山崎　ありがとうございます。それでは宮下さんお願いします。

議会・議員の限界を感じ、立候補を決意

宮下　私は二回町長選挙に立候補しているので、一回目と二回目はちょっと違いましたね。一度目の町長選挙に立候補した経緯ですが、これまで話してきたように議員として活動していく中で、非

常に制約を感じながらやってきました。私自身、自分の目指す自治体像が明確にありましたので、その実現のためには議会という合意形成の場で近づけようとやってきましたが、私の状況では合意形成の場とチェック機関にいても自分のやりたいことが出来ないと感じてしまって、だったら町長に立候補しようと思ったのが三期目の途中でした。

私が最初に立候補表明しました。するとすぐに市町村合併の頃から一緒に市民活動をし、同期議員でもあった男性が立候補を宣言しました。月形町では一般の人たちが表だって町長選挙に関わることが少なく、議員が立候補者を支援します。私と意見の合わない議員たちは危機感から町内にある福祉施設の施設長を担いできた上で、立候補宣言をした男性議員を降ろして、三つ巴を一対一の対決構図にしました。

私の方は議員一〇名のうち、自分と他二名。それ以外の七人は対立候補側になり、選挙戦に突入したわけです。大きな争点はＪＲ札沼線と町立病院の存廃だったのですが、対立候補は鉄路の絶対存続、私は状況から見て廃線は止むなしと考えていました。ただ、廃止時期も含めてその後のことは住民と話し合いながら進めて行くべきだと主張しました。町立病院も、私は有床診療所化など規模縮小を具体的に検討すべきだと主張しましたが、対立候補は現状維持でした。

結果として一四〇〇票対一〇〇〇票で敗れました。選挙については、私も町長選挙と議員選挙は違うと考えています。先ほど話したように議員は活動していれば評価してくれるという手応えがあったので、基本的に当選するのが当たり前だと思っていましたし、最低得票数を取ればいいので、それぐらいならいろいろな活動で十分で把握できると思っていました。

ですが、町長選挙は小選挙区ですから、たった一人を決める活動をしなければなりません。したがって、今までのやり方では絶対無理だと理解していました。町長選挙に挑戦するのであれば後援会を立ち上げて、ある程度組織的な運動をする必要があると考えていたので、一回目の町長選挙では後援会長に議員二期目の時の議長で、その後も議員として一緒に修正案を提出した先輩議員にお願いして、定年退職した同時期の議会事務局長にも応援を頼みました。

私自身もいろいろなところに行き挨拶をしたり、後援会長は地域の名士でしたので声をかけて人を集めてくれましたが、結果を見て、まだまだ自分の力不足を感じましたし、もう少し違うアプローチが必要だなと思いました。

それ以上に支援する議員の数の違いはやはり大きかった。さらに言えば、対立候補の前職である福祉施設は月形町では大きな施設ということもあり、利用者や雇用されている人など関係人口が多かったことも敗因の一つでしょう。結局のところ、私は小さな自治体の議員の一人でしかなかったという感じでしたね。

町政の進め方に疑問を感じ、再び議員の道へ

宮下　結果を受けてフリーの身となりましたが、今回の経験を生かして次またチャレンジしたいと思っていました。と言うのは、新町長がいくらＪＲ札沼線存続と言っても不可能で実現しそうもないし、町立病院も現状のままではいつか破綻すると思っていたので、次に向けた準備の一環として議会傍聴を続けました。

ところが、当時の議長はこれまでに話したような完全排除方針でしたから、傍聴しても資料は手に入らないし、情報公開から遠ざかっていく状態でした。そうした逆境の中でも、活動していくうちに住民に理解してもらえるだろうと考え、傍聴記をブログに書いたり、定期的に後援会だよりで全町民にお知らせしたりして、課題を見つけながらやっていました。

新町長は、ＪＲ札沼線について沿線自治体の中で真っ先に廃線を受け入れ、町立病院も指定管理者制度にすると発言し、いろいろな意味で、私が選挙戦で主張してきたことと同じ方向に進みました。プランがあってそこに向かうのと、結果としてそうなるとでは町の姿として全然違います。なし崩し的に進めるのだったら、私にやらせてくれればよかったのに、と思ってしまいましたね。

そうしているうちに、新町長は「ＪＲ廃線を契機にバスターミナルと複合施設を建設する。町内

にある皆楽公園も再整備し、併設されている温泉と宿泊施設も改修して」とハコモノ建設を言い始めました。しかも、ＪＲ北海道からの転換交付金を活用する話なのです。たとえ交付金があっても人口減少下でハコモノ建設はあり得ない。何とかしなければ、と思ったのですが、前述のように情報も入手できないし、外側にいては全然事情が分からない。結局、補欠選挙で議会に戻ることを決めました。

これに対しては「議会に出たり入ったりし過ぎだ」という批判があったのは事実です。私自身も戻ることについて、北海道大学名誉教授の神原勝先生を始め、いろいろな人に相談していましたが、政治には旬もあるし、肌感覚も鈍るから、近いところにいたほうがいい、とアドバイスを頂きました。議会の外にいても政治や情報と接点を持てるならいいのでしょうが、遮断されている状況では、やはり戻らざるを得なかった。

さらに月形町には刑務所がありますので、刑務官やその関係者が転勤で来ます。一度目は新人同士でしたが、次は現職対新人の戦いですから、私を知らない人に対する対策を考えなければなりません。知名度を上げようとマニフェスト大賞に応募して、優秀コミュニケーション戦略賞を受賞しました。そういった準備を四年間した上で、二回目の選挙に臨むことになるわけです。

まちづくりやコロナという課題が山積
背水の陣で二度目の町長選挑戦へ

宮下　二度目の立候補を後援会会長に伝えたところ、「町長の二期目は強いから止めておけ」と言われました。周囲からも「せっかく議会に戻ったのだから、もう少し我慢して次の選挙を待ってもいいのではないか」という声もありました。でも、複合施設の基本計画が示されるなどハコモノ建設が着々と進んでいくわけです。それが問題だと議会で指摘しても、結果的に数で押し切られてしまいます。そういう中で議員としていることに自分としても納得できないし、片棒を担いでいることも嫌だった。

また、新型コロナウィルス感染症のこともあって、自治体としての転換期だと感じていました。だからこそきちんと主張して勝負に出たい。この四年間でいろいろなことをやってきたので、大敗するとは思っていませんでしたし、前より票を稼げると思っていたこともあり、二度目の選挙に立候補することにしました。

ただ、選挙のやり方は変えようと考えていました。一度目の選挙は、いろいろなところに会いに行って「お願い選挙」をしました。けど、現町長も同じやり方で戦っているので、これでは陣取り合戦に過ぎません。そう考えると、たくさんの人に会ってお願いしますと言って票をもらう選挙をしてはいけない、と感じました。

私はここまで何度も話しているように、選挙戦では政策を理解してもらった上で当選したいという強い気持ちがあります。現職町長をたくさんの議員が支援している状況で、普通に当選しても議会の抵抗にあってやりたいことが実現できないと思いました。だから、町民が私の政策を理解して強く支持してくれてはじめて、町長としてやりたい政策が実現できる、と思ったんです。今回は新型コロナウィルス感染症対策もありましたので、会いに行く選挙ではなくて、ひたすら政策を伝える選挙にしました。

そして、月一回自分の考えや政策を作り込んで印刷し、住民の皆さんにお届けしました。町外の議員仲間からはよく「印刷物なんて読まないよ」と言われますが、月形町は高齢者が多いので読んでくれるのです。自分の町のことを知りたい住民に対して、情報を物語のように提供して読んでもらい、理解した上で選んでもらうという戦略です。

そうした戦略を人に話すと「甘い」「バカになりなさい」と言われました。けど、政治の同志でもある夫は、私の考える「やりたい政治を実現するための選挙」を理解してくれ、さらに「そのやり方しかない」と後押ししてくれました。なので、二回目の町長選挙は後援会組織を前面に出さず、私の思いを理解してくれた人が集まって手伝ってくれる選挙にしました。というのも、「あの後援会長がいるから」、「あの人が手伝っているから」投票しないというのがあるんですよね。それでは

本末転倒だから、私は今回裸一貫で、私の言いたいことを伝えることに徹して、それでダメならダメでもいいと考えて、後援会長など後援会組織は裏方に回ってもらいました。

二度目の立候補では議会との関係でもひと悶着ありました。私は立候補を表明したあと、議員の不在期間ができるだけ少なくなるよう、ギリギリまで議員を続けたいと考えていました。町長選挙と一緒に補欠選挙をやる場合は、告示日の一〇日前までに辞めていなければならなのですが、その場合、定例会の日程と重なると分かっていました。

だからこそ、私は「定例会直前に辞職するので、それまでは議員活動をする」と宣言していたのですが、辞職直前に全員協議会が開催されることになりました。そこでは重要な温泉改修の話がなされることになっていたので、私も議員として出席したところ、他の議員から「立候補する人間がなぜここにいるんだ」と言われ、「議員の仕事を途中で投げ出す人とは議論できないから退席する」という話になり、結局全員協議会は出来ませんでした。この出来事で私は「この人たちとは根本的に相容れない」と感じ、議会に愛想を尽かして、今回町長選挙に負けたら政治活動から引退しようと決めました。なので、背水の陣で選挙に臨みましたね。

山崎　現職との対決ですから、周りから推されて止むにやまれず立候補したと考えていたのですが、そうではなく、宮下さんの議員としての活動の制約をブレイクスルーためには町長しかないということで、敢えて二期目にチャレンジしたということですね。

今やりたい・やらなければならないことがあるから再挑戦

宮下　先ほども話したように今回の町長選挙は止められました。現職町長と一五歳離れているので、二期目が終わると相手は七〇歳を過ぎ、私も五〇代後半になります。周囲からは「脂の乗った年齢だし、ここまでやってきた実績もあるから順番として可能性がある。だから待つべきだ」と言われたのですが、これまでの議会の状況から私への対抗意識が必ずでてきて、四年後にすんなり当選できるとは思えなかった。

特にこれからの四年間は地方自治体にとって大事な時期だ、と私は思っていました。こうした時に出遅れること、ましてハコモノを建てるということは耐えられなかった。菅原さんは周りの人が推してくれて立候補したと話してくれましたが、私も周囲が推してくれるという重要性は理解しています。そうした人たちがいないわけでもなかったのですが、その声を待っていられなかったのが本音です。四年後ではタイミングが違う気がしましたし、やりたいことがあるから立候補する、が私の信条なのです。だから、周りの人からすれば迷惑だし、わがままな人だと思っていたでしょうね。

山崎　そうした政治との向き合い方があるということは非常に勉強になりました。もう少しお伺いしたいのは、首長選挙であるが故の大変さというのはどうですか。例えば首長選挙の場合、批判を始め、いろいろなことが一点に集まってきますよね。議員選挙だと大選挙区ですから、ワンオブゼム（one of them）ですが、一対一となる。議員選挙とは違う風当たりとかはありましたか。

批判されても筋を通すことが重要だった

宮下　私はずっと一人なので、何も変わりませんでしたね。自分の中で選挙のスタイルを場面に合わせることはあったとしても、風当たりとか、状況とかは常に一緒でした。私は違いをあまり感じなかったです。常に全町民を対象に議員の時もやってきたし、自分の目指す政治をするための選挙と位置づけしていましたから、批判もついて回るし。

菅原　私は先ほど話したように、議員選挙でも愛人に関する噂はありましたが、町長選挙の時はそれがグレードアップしましたね。相手方の陣営から元夫とのことなど色々言われて、なぜ我が家のことを知っているのか、と思ったものです。

山崎　首長選挙の恐ろしさですね。

菅原　私の場合は、相手方は一〇〇人規模の後援会、私は一人か二人の後援会で、手伝ってくれ

るのはグリーンシードだったり、公共政策大学院の学生で、そうした人がブログを作ってくれたり、いろいろとやってくれました。青山剛室蘭市長と齊藤啓輔余市町長などの現役首長も応援演説をしてくれたり、その仲間たちがチラシ配布などいろいろやってくれました。町民ではなく外部の人が手伝ってくれたことが相手方との違いでした。

そうしたこともあり、「私が就任すると未知の世界だから怖い」という町職員がいたことをあとから聞きましたね。私はいい悪いを含めて、役場の体質が変わらざるを得ないと考えていましたし、良い方向に変わると思っていたのですが、町職員からすれば、相手方は身内で副町長まで経験していますから、「こんなもの」とわかっている。そして、町職員には家族もいるし、親戚もいる。それに一〇〇人規模の後援会もあるし、友人、知人となれば、勝てるわけありません。議員であればそれが拡散されますけど、首長は一対一ですから、これが首長選挙の怖さですよね。

実は私も宮下さんと同じで、議会が嫌だった。先ほどから度々話している誘客交流拠点施設の入札方式は室内遊技施設としては全国初の方式で実施したのですが、私は今回の入札には不適当だと反対していました。でも、他の議員は勉強していないし、町長がいいのだからと言って、数の原理で通ってしまう。

そして、私が議員だった場合、任期中にオープンとなるので、テープカットに参加しなければなりません。反対していたのにオープニングにいるであろう自分が嫌でしたし、公共政策大学院に入った時に難癖を付けてくる議員と肩を並べるのも嫌だった。そうした環境から抜け出せたこともあって、すっきりしているのかもしれません。

山崎　筋を通したということですね。次の新たな活動を選択されたいきさつにも関係するのかもしれませんが、そうした理由もあって南幌町を離れたのでしょうか。

議会は離れても地域を見捨てたわけでない

菅原　南幌町に残っている後援会長は「町長選にも出て、四期も議員をやった人間が落選したからといって町から出て行くんだね。」と言われています。二年後に議員選挙がありますが、いろいろな方から電話やメールが来て、「二年後にまた議員選挙に出るんだよね」「出てくれないと困る」と言っていただいています。

山崎　しがらみがありながらも、熱い想いを持つ方もいるのですね。

菅原　そうした声に対し私は「新しい若い人が出るから、当選できないかもしれないからちょっと・・・」とお答えしましたが、「新人を人材育成するのは菅原しかできないじゃないか」といったありがたい言葉もいただくので、心苦しいと思う部分もありますね。とは言え、二年後のことは分かりません。

山崎　私たちの研究も二年後の統一地方選を見据えて研究を始めていますが、二年はあっという間ですからね。南幌町に戻る選択肢もあるのですね。

菅原　私を推して下さった方に迷惑をかけていますからね。

山崎　もう一点、南幌町を離れ、新たに厚真町地域おこし協力隊となった理由、目指すことお教え願えますか。

4　新たな活動を選択した理由

議員・大学院の経験が生かせる再就職先が地域おこし協力隊だった

菅原　私自身、一〇何年前から地域おこし協力隊について調査し、たくさんの協力隊員にも会いました。公共政策大学院のリサーチペーパーもそれをテーマにしたいほどでした。ほとんどの自治体では、協力隊員を一～二人採用して、観光とか自治体職員の手の届かないところをやってほしい感じなのですが、厚真町では地域おこし協力隊の制度を展開していて、上手く生かしていますね。

厚真町では町内にある会社が「この協力隊員と一緒にビジネスしたい」あるいは「この人とだったら会社成長が見込める」となれば、派遣元の役場が協力隊員と派遣先企業を審査します。役場がOKを出せば採用するという二〇二〇年度からス

タートした新制度の採用者として、地域おこし協力隊は役場が派遣元、会社が派遣先という感じで働いています。

山崎　行政が特別交付税の対象となるのでと安易に採用し、下働きのような労働力ではなくて、まちづくりの目的の達成があって、会社に所属しているということですね。

菅原　もし、今勤務している会社から直接来て欲しいと言われたら行かなかったと思いますね。自治体の採用で、住民に関われる地域おこし協力隊だから選んだので。協力隊のあるべき仕事と、会社の仕事、二つやっているかたちです。

山崎　今はどのようなお仕事をされているのでしょうか。

菅原　遺跡などの文化財関係の部署から頼まれて行ったり、住民と関わりの深いことも担当しています。会社の方は、現町長の一期目の公約で氷室を利用して沼から持ってきた天然の氷を使い、メークインを半年間寝かせたものをそのまま販売するのと、お菓子に加工したものを販売しています。厚真町の特産農産物はと言われても、ハスカップが最近注目されるくらいで、恥ずかしい話ですが、「これは」というものを私も知りませんでした。

私が勤務している会社もメークイン単体だけだと認知度がありませんから、最高糖度一二度という甘みを生かしてお菓子を作って有名にしてまちの特産物にしようと努力しています。町の特産物として世の中に出し、その一端を担うということは自治体にとってのお手伝いしているということになります。だから引き受けることしたんです。

本音を言えば、南幌町から出たくありませんでした。終の棲家として移住し、議員もやらせてもらって、町長選挙にも出て、落ちたので引っ越しというのは自分自身も罪の意識を感じています。しかし、南幌町には仕事が無かった。近隣の江別市や北広島市などにも広げ探したのですが、年齢が六〇歳を過ぎていることもあり、あっても五～六万円程度の収入か、人材不足の介護業界にしかありませんでした。ただ、腰の手術をしているから介護職を選ぶことができなかった。このままでは生活できないのでどうしようと悩みました。

実は落選した当日に厚真町地域おこし協力隊の話が舞い込んできていたのですが、「私は南幌を捨てたくないから」と言って、返事を先延ばしにしていました。話が来て一カ月ほど経ったころ「そろそろ決めてほしい」と言われ、ますます悩みました。そこで、選挙を手伝ってくれた人たちに相談したところ、「まずは自分の生活をきちんとしなさい」と言われ、「ありがたい話だから受けなさい」と背中を押してくれました。

厚真町に来てみて、自治体に関わる仕事だし、公共政策大学院で学んだことがすごく生かせていますし、私が議員のときにやりたかった住民自治も実現できている。続けていきたいと考えていますね。

山崎　なるほど。苦労の後に新しい前向きなことに携われているのですね。宮下さんは新たな活動としてどのようなことをなされていますか。今後の目指す方向についてお教え願えますか。

政治とジェンダーを社会問題化するために活動を始める

宮下　二回目の町長選挙は自分の中でやれることは全てやった中で、票を減らす結果となり、町民が選んだ新しい町政に対して、私が関われることはないと感じ、先ほど話したとおり町政から引退することを決めました。昨年末までに政治団体の解散届を出して直接的な政治分野から退き、次に何をやろうか考えることにしました。

私には農業という生活の糧はありますが、夫が主で、私はあくまでサポートというのが長く続いていましたので、今更農業に深く関わるのも考えにくい。どうしようか結構迷っていました。

去年の一一月くらいから、道庁が主催する六次産業化の勉強会に参加したり、恵庭市で市民ファシリテーターを育てる講座に参加していましたが、迷っていました。年齢的にはまだまだ出来ることはあるけれど、何がやりたいのかが解らなくなってしまった。選挙に負けたことで、議員としてやってきた知識を生かす場面がないということがすごく辛いし、勿体ないとも感じ、自分に自信がなくなってしまいました。

けれど、人の役に立ちたいと思う気持ちはあり

ましたので、給食センターか介護職で働こうと考えたときに、いろいろな人が「それは違う」「安易に飛びつく必要はなくて、もう少し時間をかけて、将来的に自分にしかできないことがあるはずだ」「もっとゆっくり休んで様子を見たら」と助言してくれました。

そうしたタイミングで、道新から政治とジェンダーの特集で取材させてほしいと連絡がありました。北海道自治体学会のジェンダー研究会代表でもありましたので、ジェンダーの問題はこれからも取り組まなければならない課題とは感じていました。記事が出てすぐに議会から、元議員とはいえ既に町民となった一個人を攻撃するような過剰な公式反論が出され、改めてジェンダーの問題を社会問題化しようと考えるようになりました。

道新の記事で話したことは、女性議員が置かれている一つの事例でしかありません。議会からの反論についても私は湾曲した捉え方をされたと感じましたが、普通ならこんなかたちの反論はしないでしょう。それをあえてここまで過剰に叩いても問題ないと思われているのが女性議員の現状です。

なので、ジェンダー問題を考える上でいい教材となるのではないかと考えていますし、私が黙っていると月形町では言論封殺、あるいは物を言っていけないということが当たり前になってしまう。議会に二人目の女性議員を送るべく、常々若い女性に声をかけていますが、彼女たちに「こんな議会には参加できない」と思われるのは困ります。だからこそ、問題を解決するためにもジェンダーの根深い問題をもう少し掘り下げて、社会問題化していく運動に繋げる、ということが目下の目標になってきました。

さらに、私が実体験したようなことが起きたときに、どう解決したらいいか全く分からないという問題もあります。最近でも群馬県草津町議会の問題が報道されていましたが、同様な問題で嫌な思いをしているケースは全国でたくさんあり、今回、そうした問題を考えるネットワークに参加することになりました。

そうしたら、司法に名誉毀損と訴えるなど、いろいろな対応方法があるんですね。ただ、地方議会には自律権の壁があり、司法判断してもらえないことがあるということも知りました。今は法務局の人権相談などに話を持ち込んでいますが、自分がいろいろな方法を模索して、その経験を生かし、相談のプラットホームができればいいなとも思っています。

地方自治のファシリテーターとして これまでの経験を還元したい

宮下　そして、今までは月形町議会という小さなフィールドでいろいろと挑戦し、実現しようと活動してきましたが、これからは日本全体で挑戦しようと考えています。その一つとして、音声SNSのClubhouse（クラブハウス）の中にある「クラブハウス党」という仮想政党に参加しています。この仮装政党には現役の首長なども参加しており、参加者はひとり一大臣を襲名することになっていたので、私は「小さな自治体担当大臣」として、これまでの経験を生かし、課題を解決するために活動しています。

クラブハウス党では、日常的に人が集まって話をする場があり、そこには日本に住む人だけでは無く、海外にいる日本人が海外の様子を伝えたり、ウイグルの人が人種差別の話をしたり、ジェンダーの話がでたり、いろいろな話がやりとりされています。他の参加者も子どもの虐待など、自分の専門を生かしつつ、やりたいことをしていますが、これこそが政治を身近なものにする活動だ、と私は思っています。

もう一つは市民活動へのサポートです。今私が関わっているのは、農家仲間が住む安平町で計画されている産業廃棄物最終処分場計画です。町内には既に一カ所あるのですが、胆振東部地震の震源地からほど近く、飲用水として地下水を利用している地区に二カ所目の建設が予定されていることが問題となっています。

市民がこうした問題に直面し、何かしなければと思ったとき、本来は議会が関わり、取り組むべきなのですが、たいがい向き合ってくれません。私は、市民の想いを実現するための橋渡しをしたいと考えています。安平町のケースでは、誰か力になってくれそうな議員を一人見つけて、議会に

請願を上げるようアドバイスしました。それでも動きが鈍かったので、意志表示のための署名を集め、専門家を呼んで町民向けの学習会を企画し、マスコミにも案内しようなど、これまでの経験を生かしてともに活動しています。

こうした事例はどこにでもあります。例えば、長沼町では市街地に多発乱立する事業用太陽光発電所に対する市民運動が盛んになっています。長沼町の場合は共産党の議員で熱心に活動されている方がいましたので、私はかなり外側から、市民団体の代表者と意見交換などして応援しています。こうした努力もあり、長沼町では二〇二一年四月から太陽光発電施設の設置に関するガイドラインが制定されました。

自由な身になったからこそ出来ることもありますし、知識を生かし、物事を俯瞰しながらアドバイスできる役割となれれば、新しい社会を作ることができるはずです。これに繋がる活動をやっていきたいと考えています。

山崎　そうした様々な人々の困ったことを解決するプラットホームを考えているんですね。

宮下　問題や嫌がらせに遭うのは活動家ばかりですが、皆さん方向さえ分かれば解決できる人たちです。だけど、事が起きてすぐは何をしていいか分からないし、孤立してしまう。私は今回の経験がきっけになり、人権やジェンダー問題に取り組む弁護士や研究者、マスコミ関係者とも接点ができました。こうした人たちとも協力し合いながら、今までよりもフィールドが広がった中で社会活動を展開していきたい。もちろん、女性議員を増やす活動も合わせてやっていきたいですね。

山崎　ますますご多忙となられるのですね。いろいろな話をしていただきありがとうございました。時間もかなり経っていますので、最後にお二人の素晴らしい議員活動、その間に経験された苦労を踏まえ、これから地方政治を目指す若者や女性へのメッセージを一言お願いできますか。

5　これから地方政治をめざす若者や女性へのメッセージ

ひとり親家庭の方が議員を目指すなら周囲の好意に甘えられる人になろう

菅原　私のところには、娘の友達や私を知っている若い人から「議員になりたいので、相談に乗って下さい」と連絡がよくあります。その人たちにいつも言うのは「議員だからこそ知り得ること、普段の生活では体験できないことがたくさんあるので、そういう意味では見聞を広げられるし、自分も成長できるのでいいと思います」とアドバイスしています。

今まで相談してきたのは全員二〇～三〇代の男性でしたが、女性に限って言えば、さきほど話したようにハードルは高いです。子どもがいればなおさらそうなります。でも、周りに協力してもらうことは恥ずかしいことではありません。何気なく助けてくれることについて「ありがとうございます」と言って、議会活動してくれればいいと思うんですよね。

なので、肩肘はらないで、お願いするところはする。だからと言ってそれに甘んじてはいけませんが。

あと、家族の理解は必要だと思いますね。子どもや夫の弁当を作るから帰りますというのはできませんから。家族の了解をもらって、議会に専念しなければならない時もありますが、女性でも十分出来ると思いますね。ぜひ若い人に議員となっていただきたいです。

山崎　ありがとうございます。では、宮下さんお願いします。

忘れてはいけない「自覚者が責任者」「個人的なことは政治的なこと」

宮下　私は二つの言葉を贈りたいと思います。一つは「自覚者が責任者」。気づいた人が責任を持って行動することです。それは、先ほど話した仮想政党「クラブハウス党」の党首である谷畑英吾前湖南市長が言っている言葉です。誰かに任せて待っていても世の中は変わりませんから、気づいた人が責任を持って行動する。これが政治の原点です。

もう一つは、よく聞く言葉かもしれませんが「個人的なことは政治的なこと」です。普通に生活していると、個人的なことだから自分の中で収めて

おこうと思いがちですが、三人集まれば政治が発生するし、個人的なことの課題というのが社会全体の政治課題にリンクします。特に若い女性は社会のしくみの中で、メインに考えられていませんから、常に蚊帳の外になりがちです。けれど、その人たちの悩みそのものが社会をよくすることに繋がります。

私が議員をやってきてすごく感じたのは、女性や若者のためと言っていろいろな施策が講じられていますが、議会は中高年男性主体ですから、あちら側から想像した範囲内でしか手を差し伸べていない。実態側の求めていることは自分たちから働きかけがない限り、実現できません。だからこそ、当事者、自覚者の重要性を感じて、それを行動に移して欲しいと思っています。

しかしながら、考え方や行動様式は多様です。議員と言っても、月形町では八人しかいません。どんなに多様な人が集まったとしても限界があります。そうした前提を踏まえると、ひとり一人のところからスタートしなければならないとダメだと考えています。

私も議員になる前は、当時の議員が「子育て中のお母さんのことを我が事として考えてくれている」と思っていました。確かに考えていてくれてはいましたが、それは相手が発想した中での考えであって、現実とは乖離がありました。だからこそダイバーシティがすごく必要で、それを体現するためには、その人たちが入ってこない限り難しいでしょう。

また、クオータ制などいろいろな制度を導入しても、「そもそも議員のなり手がいないのだから意味がない」という指摘もありますが、それは上からの発想で、全員に「自覚者は責任者」「個人的なことは政治的なこと」の思考が浸透すれば、席が空いていることはあり得ません。政治とは、自分の生活の延長線上にあるものだと理解して欲しいですね。議員になる前に勉強してもいいですが、なってからも勉強する場が十分与えられるので、そこから勉強するでもいいと思います。

さらに、選挙も難しく考える必要はありません。よくよく考えてください。落選者は一人か二人で、全体で見れば立候補者の何割かしかいません。皆さん選挙に出ると上位当選を目指し、あれこれ考えてしまいますが、最下位当選をターゲットに戦略を練ればいいんです。昔と異なり、やり方の情報もたくさん公開されていますから、恐れることはありません。本人がやりたいと思えば、応援してくれる人もいますし、可能性しかありません。

山崎　長時間に渡りありがとうございます。宮下さんの発言は非常に含蓄のある言葉でした。予定の時間を超えましたので、これで鼎談を終えます。

本稿は二〇二一年四月八日に行った鼎談をまとめたものです。

文責・編集部